

めだったが、そんなことは地上と空中では連絡の取りようがない愚痴である。「地上の野郎どもが勝手な熱を吹いても、どうせこっちは明日か明後日神様になるんだ、一丁勇ましいところを見せてやろうか」と、やんちゃな気持ちでエンジンをワンワンふかす。その風に吹き飛びそうになりながら地上整備員数十人が「ウンサ、ウンサ」と飛行機を押すがなかなか出そうにもない。その中の班長らしいのが手を貸そうとしない。

この野郎と違ってよく見ると同級生の野口であった。二人共に一曹である。私は彼に「明日は鹿屋から出撃だ。家へ元気で死んでいったと伝えてくれ」と頼んだ。日の丸ずくめの姿に、目だけがギョロギョロと光っている無気味な様相に、野口は慌てたらしい。私等は敵機の来襲前に出発し、翌早朝薄暗い出水空をついて飛び立った。野口は班員を連れて「帽振れ」の見送りをしてくれ、鹿屋に着陸したのは六時ちょっと前であった。

一応愛機を分散し掩体壕に誘導する。私の愛機は二七号と決まった。私が新入隊し過ぎたころとは基地

の様相は変わり悲壮な気持ちになった。いつ空襲されるかもしれない。いよいよ明日は、子機「桜花」を抱いて出撃である。あれを思い、これを思うがもう覚悟は決めていた。既に多くの上官、同期生、後輩が戦死している。沖縄の米艦船の蝟集状況は「彩雲」の航空写真で見たが、今日一日の命かとも思い、鹿屋の一夜を明かした。

飛行場大隊

満州の訓練と

比島の切り込み隊

茨城県 仁平 六三

昭和十六年九月一日午前八時、これは忘れることのできない私の入営への旅立ちの日時である。近親者や近所の方々の見送りを受け、小雨降る中簡単な挨拶をして、一路千葉県柏の第四航空教育隊へと向かった。

第三中隊永野隊鈴木班で、二、三日はお客様扱いであ

ったが、班長の訓示では「お前達は消耗品である。一錢五厘（郵便葉書の値段）で幾らでも入ってくる。また、日に乾ききった桶である。これもみっちり締めなければ水が漏れる、水が漏れぬよう締め上げてやるから覚悟するように」と言われた。これから、いよいよ、徹底的に締め上げられる軍隊生活と訓練が始まったのである。それは聞きしに勝る苛酷なものであった。

私は一般訓練のほか、特技訓練としてラッパの教育を受けたが、最初は音が出ず、一カ月後によく吹けるようになった。内務班に帰れば、古兵の怒鳴る声、ピンタの音を聞かぬ日はない、まさに監獄より苦しい所であった。一期の検閲を終え、一等兵の階級章をつけた頃出動命令が出た。

一月三日午後七時、柏駅を夜行列車で出発、京都へは明け方着。さらに宇品港付近で検疫を済ませて防寒服が支給される。満州へ行くのだと直感し乗船、玄界灘は荒れに荒れ、船は木の葉のように揺れながら釜山港着。一路北上し着いた部隊は平壤の朝鮮第八十八部

隊の残留部隊であった。本隊の満州延吉の駐留地に着くと一面の雪であり、身を切るような寒さであった。部隊名は、第三十七飛行場大隊、隊長・長岡登少佐、山本中隊田崎班に入る。初年兵はおらず、後の兵が来るまでは初年兵の苦勞をいやというほど味わわされた。

八月一日上等兵に進級すると、人事係より下士官候補を志願するように勧められた。試験を受ける以上はと頑張り受験者トップでパスすることが出来た。昭和十八年三月一日兵長、師団演習も無事終了。七月一日伍長に任官、ノンジャンの大演習に参加、後、部下の過失（失火）の責任を負い、零下十五度の営倉入りの苦勞もあった。服のボタンは取られ、紐類は一切なし、毛布二枚で三日間の罰は、責任者として負わねばならぬ一つの試練であった。

班に戻ってからは、毎日雪中での戦闘訓練から飛行場の整備、風速二十メートルともなれば気温は零下四十度を超す。防寒具を着けての行動は思うに任せない。その頃部隊長は田坂大尉となっており、訓練は日

夜続けられた。東京空襲の報を聞いたと同時に、ロシアからの空襲を思い山頂に登り昼夜交替で対空監視につく。また爆撃演習監視等任務は変わり、更には演習は実戦を想定し実施されるようになった。その後、南方の戦況が激変し南方転進の命を受けた。

満州・朝鮮国境を越え釜山港より乗船、九州三池港で燃料を補給し船団二十八隻にて出港した。七列四縦隊、前後に護衛艦、台湾高雄に寄港し二昼夜停泊する。敵潜水艦出没の報であった。高雄を出港し二日目の昼、隣の船が魚雷攻撃を受け沈んで行くのを見た。

今夜がバシー海峡通過、危険な場所であるのとこと、波は荒く船は木の葉の如く揺れてくる。船酔いが次々と出てくるので対潜監視につくものが少なくなつた。隊長が私に監視につくよう命令されたので、船先にかぶりを身につけて監視に立つ。七メートルにも上下し、左右、前方と交互に揺れる。夜中の十一時頃「魚雷発見」の音が聞こえると同時に破裂の音、爆雷の音また音、私は目を光らせた。

すると、右前方七、八十メートルに白波を立てて我

が船の方に進んで来る。「魚雷発見右前方」と怒号する。すると船先を魚雷の来る方に向けた。あわやと思う瞬間魚雷が船側をかすめて後方に白波を残して去って行く。すると、右側を進んでいた輸送船が魚雷を受けた。物凄い爆発音がする。その船は弾薬と燃料を積んでいたのが爆裂が物凄い。火柱が一〇〇メートル以上も上がる。兵員が逆さになって海へ落ちて行くのが手にとるように見えた。

燃料が海に流れ火となって燃え拡がり、一面火の海と化す。私等の乗船がはつきり目標になるように見え心配したが、頭には魚雷発見に目を光らせることだけで警戒に努めた。またもや左前方より魚雷が白波を立てて向かってくる。六十メートルにも迫っている。

「魚雷発見」の怒号、船先を魚雷方向に向けた瞬間、船をかすめて後方に去り胸をなで下ろす。これが二、三時間の出来事であった。

目をかすめて四方の海を見ると船影が見当たらない。皆、沈められてしまったのかと思った。すると最速二十四ノットで走れる船が四ノットしか出せない

という。スクリューが魚雷で故障したらしい。またも不安を感じる。今にも魚雷を受けるのではないかと不安でならないので警戒を続ける。夜が白々と明け始めた。

監視交替となり、部隊のいる所へ戻ると、またびつくりした。同郷の太子町の戦友浅見公隆君が爆薬の破片を頭に受け戦死したとのこと。そこで小指を切断して飯盒に入れ携帯燃料で焼いて骨を故郷に送ることとして遺体は水葬にした。

船はようやくルソン島のマニラ港に着き、乗組員から「よく無事で来られたよ」と怒鳴られた。二十一隻は撃沈され、残ったのは我々の六隻だけだという。マニラへ上陸し、旧学校の空き室に駐留後一週間、また乗船してレイテ島のタクロバン港に停泊、翌日ネグロス島・セブ島の近海を警戒しつつ進航する。着いた所がミンダナオ島のカガヤン港である。栈橋を渡り海を見て澄みきっているのに吃驚する。魚の泳いでいる姿が手に取るように見えた。

荷揚げ作業に二日ぐらいかかる。本隊はトラックに

荷を積んで一路マライバライの前線飛行場に向かう。私は部下十人程度で、住民の家を宿舎として警備のため駐留。後に交代があり本隊の所で連日陣地構築や防空壕の構築作業に従事した。

マライバライ駐屯中、茨城県出身の石川利夫一等兵が病死。火葬せよの命令で飛行場の奥四キロほど山に入った所まで背負い、夕方薄暗くなるのを待って火葬にし、途中二十分ぐらいで火が消えてしまった。このままでは始末に悪いので遺体を動かす。死体の肉が手に付くなど、とにかく骨にするのに四時間かかった。

レイテ島停泊中病死した早瀬一等兵を兵二人と共に背負って港から四キロほどある焼却場まで行き、住民の家の古材を井桁に組んで遺体を載せ、少量のガソリンをかけて三時間以上かかって茶毘に付し骨を拾った時もあった。この体験は戦地・戦場でなければ体験しない、悲しい、いやな思い出であった。石川一等兵の遺骨は石川曹長が宰領し一度内地へ帰ったが、その後激戦地となり再度彼とは会うことがなかった。

その後、カガヤンの滞貨衛兵を命ぜられ、私以下十

五人は現地住民の家屋を宿泊所として泊まり、一キロほどの所にある滞貨物を警備した。二人ずつの立哨である。忘れもしない昭和十九年九月九日、宿泊警戒中、朝早く爆音、顔を出して見ると高度四、五千メートルぐらいの所を多数の飛行機が飛んできた。その前に中支より二個戦隊が応援に来るといふ命令を受けていたので友軍機が来たと思ひ、笑顔で共に朝食をとり始めるや否や、通過する飛行機にはアメリカの星が付いている。全員避難せよと言ひ壕に飛び込む。すると、次から次と飛来し爆弾投下、機銃掃射、雨の如く弾が飛んで来た。

私は滞貨物の方に行こうとするがなかなか行くことが出来ない。小銃で撃ち上げるが効果なし、その頃カガンン地区には歩兵、砲兵、工兵の部隊が上陸したばかりだったので、一斉に射撃するが、機も撃ち墜とすことが出来なかつた。

海岸近くの滞貨所に行くと、遙か水平線の近くには二線、三線と飛行機が見え、波状攻撃である。滞貨物までの道路は血で一面赤く染められ、数知れずの人が

苦しんでいる。何とも痛ましい光景であつた。

以来、毎日のように空襲が続き、命があるのが不思議なようであつた。この間B24コンソリデット重爆撃機が飛来。来たな、と思ひ壕に飛び込む、一トン爆弾の投下である。物凄い音と共に落下して来る。「これはやられたな」と思ひきや五十メートルの近距離に落下炸裂、砂塵を吹き上げる震動で壕の中でも上下した。その砂塵で体が埋められたが、自分の痛さを忘れて部下の生死の確認に駆け回る。一人もやられていないのに安堵した。夜になると痛みが出てくるが我慢する外なかつた。

その後、爆弾の跡を見ると、砂塵が山のようになり、穴は横二十メートル、縦二十メートル、深さ十メートルもありびっくりした。その時の爆風で四十間もある病院が横倒しになっていた。しかし、友軍の飛行機は一機も来ない。聞くところによるとルソンのクラーク飛行場では戦爆二百機が全滅とのことであつた。

日々砲火機・資材・燃料は少なくなっていくばかり。その後、勤務交替の時間いたが、隊に向かう途中

対空監視は付けているが、低空飛行のため見えなかったという。「飛行機発見！」の声と同時に飛行機は上空に来て機銃掃射をあびせる。我々が機銃掃射を受けた時は、車のエンジンをかけたまま飛び降りる。自動車は無人で進み、敵機は自動車を目標にして銃弾を撃つ。自動車は消失してしまつたが、人員の犠牲者はなく安心した。連絡を取って迎えに来てもらつた。その時の敵機はロッキードP38機であつた。

また、小雨が降る日に空襲がある。壕に飛び込むや爆弾の雨である。田沼伍長と近い壕に入ったが、爆弾が発弾であつたため、負傷者はあつたが戦死者はなく安心した。私も助かるという幸運であつた。

また、衛兵についていた時である。空襲警報と同時に飛行機が来襲、機銃掃射・爆弾投下してくる。私が壕に飛び込む瞬間、掃射の弾が鉄帽をかすって土中に刺さつた。一秒遅れていたら命中戦死していたと思う。その後、毎日といつていくらい空襲された。制空・制海権を連合軍に握られては、応援隊が来るのは無理であつた。しかし、戦闘は続行しなくてはな

らず、ゲリラ戦で対戦する以外に何もない。食糧は日々少なくなされていき、思うように食わないでも、営外の作業をすると、南方のため果実を見付けては腹の足しにしていた。

マライバライ駐屯では、毎日防空防衛の陣地構築。私は兵十人と共に分哨につき、その前哨に棚橋中尉以下七人。分哨で動哨中に野生の水牛を射殺し天日で乾燥し乾肉として保存し、その乾燥肉が密林に入つてから大変助かつた。

次に夜間切り込み隊が編成されたが、その目的は「敵を攪乱し、敵の指揮班に突入し、敵の作戦命令書を取得する」とある。これがため、敵の駐留地に夜間十二、三人にて、真つ暗闇に白い手袋を合図に敵前十メートル地点に突撃をかけ敵中に突入、敵に損害を与えるのである。

私も長として二回ほど突入したが、初めは効果があつたが、後は三十メートル地点まで進んだ所で音でも出ると、照明灯が光り銃弾が雨のように飛んで来るので、敵中に飛び込むことが出来ない状況になつてしま

った。

いろいろとゲリラ戦で戦ってきたが、食糧、銃弾、兵員も少なくなるばかりで、とても米軍と対抗しかねて、再起を待つべく密林を通り身を隠すべく山中に入ったのである。

生活に必要な食糧、銃弾、物資を背負い袋に入れて、いよいよ山中に入る。山の草木を切って前進するので一日いくらか進めない。敵に追われると背負い袋では進みにくいので、思いついたのが背負いはしごである。背に合うように木を切ってマニラ麻をからめて造る。すべての装具を乗せて背負うと、背負い袋より楽で、行動も自由に来る。それで全員背負いはしごにする。どんだん山奥に入る。密林ばかりの行軍であり、毎日スコールがやってくる。体はぬれぬずみのように日々疲れるばかりであった。

空には米軍の観測機が飛んで来る。少しの音もキャッチして発煙筒が投下されると、迫撃砲が飛んできて炸裂する。犠牲者の骨を一緒に持ち帰ることも出来ない。山奥に入るにつれ食糧が少なくなってくる。青草

を糧にして食す。最後の頃は米が無く青草ばかりの食事。一日の行軍が一キロ五〇〇メートルぐらいしか進めない。蛇・蛙・バッタなど食べそうなものは何でも食う。火を燃やすことが出来ないから生のまま食う。しかし、つかまえるのに一苦労。バッタなどはなかなか捕れない。体がいいうことをきかぬ。皆ではたくがなかなかはたけない。捕らえると一匹のバッタを三人で分け合った。

ある夜、川で水を汲み食事を作った。いよいよ食べようとすると悪臭がただよう。でも腹が空いているので食ってしまう。朝になり川上を見ると、川の中に兵隊の死骸が腐敗している。その下で飯を炊いたのだから悪臭が出たのだ。この様な生活の連続であるから衰弱するばかりであった。

ミンダナオ島の中頃に州境山の近くまで入ってしまったと周囲は密林で民家は見当たらない。その山を登りつめた所に畑が見える。トウモロコシ、粟、さつまい、芋、陸稻が作つてある。これは良い所へ来た。近くに民家があるということで、それからはそこに住み付い

た。作物を持って来て煮て料理する。三日ぐらい過ぎた頃住民の襲撃を受けた。原住民は穂先から四〇センチ、柄の長さ二メートルの槍を持っていて、腰に蛮刀を付けた丸裸である。私の所でも、江刺一等兵が沢に芋洗いに行ったところ、「ギャー」と悲鳴がするので行つて見ると槍が背から腹まで突き抜けていて死んでいた。

その夜向こうの山の小屋で灯が輝いていた。後に聞いて吃驚、整備班の宿っていた小屋が襲撃され全滅してしまった。その後の夜に不寝番が「敵襲」と怒鳴り、軽機関銃を乱射した。原上等兵の脇に光る物が見える、まさしく槍であるので、その槍を掴み取ると敵は退散した。毎夜のように襲撃である。これでは夜寝ることも出来ない。それで、先の方に民家が見えるので視察に行った。ダバオ生まれの現地人を連れて歩く。彼は日本語も幾らか出来、ビサヤ語も出来るので通訳を依頼したのだが、その部落の酋長をしているという。

前日、その部落をアメリカ軍の飛行機が爆撃してし

まったので、日本軍の我々に好意を持ってくれた。酋長曰く「それでは手を組んでやりましょう」という返事なので早速住み込む。酋長の話だと、前の部落はブルダンという酋長で喧嘩相手だそうである。全員その部落に入った。家も一軒貸してくれ、先ず作物を半分分けてくれ、その採り方の指示を受ける。作物を取ってきて煮て食べるから、日々体力がついてきた。

収穫をすると、家の床の上に置き、笛や太鼓で踊りながら足の裏で踏み潰す。その粉を一度蒸し、少し乾かして杵のような物で搗くと白米になる。それを竹筒に水とともに入れて火の中に入れる。竹が燃えきらぬうちに握り飯が出来て、まことに美味しいのである。そのうちに言葉は判らなくても信じ合うようになった。

そうして生活している時、日本軍から連絡がきた。「日本は無条件降伏した」という知らせであった。その日は、多分九月十七日頃だったと思う。酋長には、日本軍が負けたと言わずに「日本へ帰れという通知が来たから」と言つてそこを離れた。愛情が湧き、涙な

がらに別れを告げる。別れる時原住民は握り飯を一人一組ずつ作ってくれた。ありがたく感謝しつつ別れた。

これから降伏、俘虜生活が始まるのである。白旗をかかげ、背負いはしごに装具を付けて山を降りた。服はぼろぼろ、髭はぼうぼうで、体力は取り戻したが本当の体ではなくみすぼらしい姿である。その時、軍隊のくせがぬけず、先発隊を七人ほど出した。暑かったのか、川で水泳ぎでもしていたのか、裸のまま全員殺されていて、誠に残念であった。遺体に黙禱を捧げる。後ろ髪を引かれる思いであり、悲しさを残し降伏の場へと急ぐ。場所はブラゲ川の川原である。川岸に着くなり、アメリカの兵士が待っていた。

降伏の場所に入るなり丸裸にされ何一つ持つことは禁じられた。兵器は没収され、衣服装具、所持品はカ所に山と積まれてガソリンをかけて焼かれてしまった。飯盒の蓋に五センチ四方で厚さ二ミリほどのパン四枚、シチューを飯盒の蓋に七分目ぐらいを頂きそれが夕食であった。

それから丸裸で一キロ程の所にある捕虜収容所に入ると背中の上にPWの文字の書かれた服を渡された。

服が大きいので手は出ず、足は見えず、まことに滑稽な姿であった。それで、長い部分を切り取り体に合うようにして着用。食事はパン四枚とシチューで、腹は空き続きであるが荷物の積み上げ、積み替え作業をさせられた。途中自動車で往復する度に現地人に石を投げられ、近付くと危害を加えられたりすることもあった。それでも、何一つ抵抗することが出来ないのだから惨めである。戦争に負けるということはこのようなことかと、つくづく思ったがアメリカの兵は優しく、現地人を追い払ってくれた。

毎日あのような食事では働けないと思っっているうちに、隊長が日本人の二世の人と代わった。日本人は米が主食だから米でなければと言っ、カナダ米を取り寄せてくれ、その後米食が出るようになり、体力もついてきた。

ある日、アメリカの将校の事務所の部屋を掃除に行った時、机の上に女性の写真があり、それを拭いてい

ると、その女性は妻であると言い、お礼の意味でタバコを一箱くれたことがあった。

その後、私は少々体調を崩したのでその収容所に残され、本隊と別れ別れになってしまった。それ以来、中隊長と合う機会は無かった。復員後、中隊長より茨城の五浦海岸に旅行に行くとの便りあり、袋田滝の近くの食堂で再会し戦地の想い出を話し合ったことがあった。

ある日、作業から帰ると日本へ帰れるという噂が飛んだ。そのうちにアメリカ軍から名簿が届き、名を呼ばれた者は日本へ帰すから明日集合せよとのことである。呼ばれるか、呼ばれないかと不安でいるうち、私の名前が呼ばれ、胸のしこりが除かれ、乗船の日も告げられた。なぜ不安かというと、前日住民の首実験があったからである。戦犯容疑者は残されてしまうというから、身に覚えのない罪を着せられてはと、本当に不安であった。

復員船はアメリカのフリゲート艦で、後ろが観音開きになっており、渡り棧橋が出来る。それもそのは

ず、上陸用舟艇が六十隻も入るということである。出港何日か過ぎてても日本が見えないので不安であったが、出港十一日目の朝、富士山が朝日に映えてくっきり浮いて見えた。「富士山が見えるぞ」と叫ぶと一同目を向ける。それほど懐かしく、美しい富士山を見たことはなかった。喜び合っている間に船は横須賀の港に着いた。

上陸し、二、三日滞在の間検疫等済ませ、服や乗車券が支給になり、帰路につく。汽車は満員、屋根にまで乗っている。敗戦の惨めさは上陸第一歩でしみじみと感じた。上野駅に着くなり子供が寄って来て「何かくれ」とせがむ。目を離すと品物が取られてしまう。物資不足とはこういうものかと思った。

西金駅で下車したが行き合う人、皆記憶がない。私の人相も変わってしまったらしい。義兄すら判らぬようである。私と前になり、後になりして家に着き、はじめて義兄であることが判った。仏壇に無事復員出来たことを報告し、祈りを捧げ、家族と一夜を語り過ごした。これで、私の軍隊生活は終わりとなったのであ

る。

比島で壊滅した

第三三航空地部隊

愛知県 山崎 重藏

私は、大正六年十二月十四日、名古屋市の名古屋城下の雑貨商の家で生まれ、名古屋に育った。私は長男で、弟二人妹一人の家庭であった。昭和十三年、徴集兵として検査を受けたが丙種だった。そして昭和十六年に結婚し、時代も戦時となり、昭和十七年七月再検査の結果第一乙種合格となる。同年八月召集、三島の野戦重砲兵第二連隊に入隊。同十八年一月甲種幹部候補生に合格、四月より航空隊の教育を受けた。

三重県の明野飛行学校の分校が三重県鈴鹿にできた。中部第一二三部隊である。私は大学では文科であったが、教育は飛行機の整備の教育を受けた。戦闘機につける機関銃、爆弾を装置する教育が半年続けられ

た。四月入校、十月卒業であるから約七カ月の教育で曹長の階級に進み見習士官となる。同期生は千数百人おり、各科に別れた。

昭和十八年十月、水戸の航空隊に転属、十一月三日、当時の明治節の式が終わって、南方の第四航空軍（フィリピン）に転属となり、広島兵站宿舍から宇品へ呉へ行く。その時、レイテ戦へ行く戦艦「伊勢」、巡洋艦二隻、駆逐艦十隻の艦隊に便乗させてもらった。その時は航空将校ばかり六〇数人であった。海南島で、マラッカから来た駆潜艇二隻に乗り換えた。何しろ、戦艦以下十数隻の艦隊であるから、途中は雷撃も受けることはなく、無傷で海南島着であった。

今度は駆潜艇でマニラ着、艦隊はレイテ戦に参加したのである。我々の司令官の富永中将に転属の申告をした。十二月に、司令官から命令が出て、第一二七飛行場大隊のあるリバ（レイテの向こう側）へ行き、レイテへ出撃する特別攻撃隊の乗機の整備をして送り出していた。再び還ることのない若い人々を見送るのは悲壮なものがあった。